

後期高齢者の



つぶやき

後期高齢者のつばやき

城所 進

少し前市役所から、「後期高齢者医療保険納付済額のお知らせ」なるハガキが届いた。「確定申告などの資料としてご利用ください」と書いてある。

高齢者が増え医療保険制度維持の為に、七十五歳以上が後期高齢者として枠組みが作られ、若者と別扱いされる様になったのである。後期高齢者とはどのくらいの人口を占め、医療費の割合ををどのくらい使っているのか、その根拠も示されず、見通しも我々には分からないままに、後期高齢者医療制度が発足されたのである。

確かに若い人よりは一人当たり多くの医療費を使っているのだとは、何となく分かるくらいである。

その人口の部分が、ようやく今年の四月中旬の新聞に「戦後生まれ四分三を越す」と言う見出しで、総務省が昨年十月一日現在の推計人口を発表したので

ある。それによると七十五歳以上の年齢層は総人口の十・四%と発表されており、計算してみると一千三百万人位となっている。そしてその内私のように大正生まれの人口は、五百六十六万三千人で、四・四%を占めている。

人口割合がようやく分かって来たのである。総人口の一割強の為に別の保険制度を作り、管理しているのである。

そして「後期高齢者保険制度」の後期とは何の意味を指す言葉なのであろうか？ その属する年齢から考えても、人生の終わりの時期を指す言葉としか受け取れない。

官僚がつけたか、誰が付けたか知らないが、当事者の受ける心情を考えない名称としか思えない言い回しである。

それとも「前期高齢者保険制度」を作る為の前提として決めたものなのであろうか？

思えば、我々その後期高齢者に属する人達は、今から七十八年前の昭和六年から始まった満州事変から支那事変、太平洋戦争、と「臨時招集礼状」の書き出しで始まる赤紙一枚で戦争に駆り出され、北方に、あるいは南方に出陣し、その苛酷な戦争の犠牲になり、魚雷で海の藻くずとされた犬死の犠牲者は、何

万と居ることであろう。

国内では私の実家のあった東京の町内も二度に渡る空襲を受け、電気の来る前の灯かりであった、ガス灯の配管が天井裏にはってあった旧家の実家も、雨のように降る焼夷弾で、焼け野原の中に一晩で消失し、逃げ場を失った多くの人が死んだのである。

明治神宮のそばにあった青南小学校の後輩の卒業生が書いた、昭和二十年五月二十五日の空襲の体験談集で、焼死体が累々と並んでいる写真を表紙にした書籍「青山炎上」の一部をお借りすると、

「みんなが十六、十七歳だったあの日、青南が燃えた日、表参道交差点がどんな悲惨なおぞましい場所になったかは、多くの人が見て知っている。立ち木の根元にも、二基の石灯籠のまわりにも、左角の安田銀行の鉄扉前にもうずたかく二階まで達する焼死体の山、山、火事場風とか言うもののせいとか？吹き上げられたように積み上げられて死んでいた人々。その「山」を泣きながら崩して、父を、母を、兄弟を声を限りに叫ぶ人々。あの光景は思い出したくない。現場写真は見たくない。……」

それでも書かなければならない。後の世代に語り継ぐためには。……」

との書き出して多くの友達が悲惨な当時の体験談を書き綴っている。その後輩たちも皆後期高齢者の仲間に入りそれぞれ的人生を頑張っているのである。

また少年兵として志願して戦地に行った私の友達も多数戦死したのである。

「母は来ました、母は来た。この岸壁に今日も来た。帰らぬ事とは知りながら……」

紅白歌合戦で今も歌われている引き上げ兵士を待つ母の心情を表したものであり、帰らぬ人を待つ切々たる歌が、六十年経った今も我々の心を打ち続けている。

敗戦、そして戦地で生き残った何百万と言う兵隊さんたちも、命は助かったものの物凄い苦勞をして祖国に帰りついた人たちである。戦後汽車通で勤務していた私の汽車等は、満員で物を乗せる網棚の上に乗って復員兵が乗り、我々はとても中に入れぬ状態が続き、自動ドアでない当時の汽車の入り口のすりにぶら下がりながら通勤したものだ。

そして生き残った我々は、資源もなく、食べ物を買う外貨もない日本で戦後の復興へと、藁入りパンを食べ、芋の切れ端を拾って空き腹を耐え頑張った人達の多くが、現在後期高齢者となっているのである。

私が携わった自動車産業でも、二十一年中頃から作り出した戦後最初の小型トラックは、鉄が不足していたので、運転席回りのドアを付けている柱は木の柱であり、又左右のドアの下の部分はベニヤ板で作られていた。又国内のゴム材料が不足し、タイヤの無い自動車が工場の空き地に充満した一時もあった。その困難の中、外貨を稼ぐために歯を食いしばり、空腹を我慢しながら頑張ったのである。政府がつけた様に、年齢的に確かに後わずかな人生かも知れないが、もう少しその身になった感情を考慮した表現が、有るのでは無いかと僻みたくなるのは、私ばかりでは無さそうだ。

私の生まれた実家は旧区制で東京赤坂区青山高樹町（現在港区青山七丁目）で、町全体の地主は高木子爵（現天皇の叔父に当たる三笠の宮のお後の実家）であった。小さい私は父親について地代を払いに行くと、整えられた庭に六畳程の畳みの事務所があり、和服を着た男の人が、分厚い台帳に墨でいねいに記帳しており、代官屋敷に来たような雰囲気を与えられていた。そして私たちはよく貴族の方を「高貴のお方」と呼んでいた。

今から百年以上も昔の明治憲法で制定された貴族院、そこで我々平民と貴族が制定され生まれた言葉である。

新憲法により、貴族院制度のなくなった現在であり、別に我々を「高貴高齢者」と書いて欲しいなどとは一つも思っていない。でも、最近その後期高齢者から政府の付けた字は字の誤りで、後期高齢者とは「光輝高齢者」と書くのが本当なのだと言うつぶやきを聞いた。確かにこの歳の人達に相応しい書き方であり、うまく付けたものだとは何となく心に納得したものであった。

今日日本は、百年に一度の経済危機だと麻生首相は言っていて、次から次ぎえと税金をばらまいているが、株や何かで大損をした一部の人や企業も、皆で支え合う努力をすれば、我々の時代とは異なり、食べ物や日用品は豊富に店にあふれ、贅沢をしなければ充分生活出来るのである。

我々後期高齢者は神武天皇即位から二六〇〇年余、一度も負けた事のない国に育ち生きて来たのである。そして二六〇〇年に一度の祖国の滅亡に近い時期に遭遇した者達である。都市と言う都市は一面の焼け野が原、一発の広島原爆で二十万人と言う犠牲者を出し、「みどりの丘の赤い屋根、トンガリ帽子の時計台、鐘が鳴りますリンコンカン、メイメイ子ヤギが鳴いてます……明日はもっと幸せに……」と戦後よく歌われた「鐘の鳴る丘」の様に、一晩の空襲で親兄弟を無くし、食べる物も無く路頭で寝起きした悲しみの戦災孤児も

多くおり、その悲しみは今も心深く漂っている事であろう。文献によると昭和二十二年に東京都内の年間収容浮浪者一万一千十五人、徘徊浮浪者三千七百人と記録されている。全国ではどのくらいの人数になる事であろうか？

今、日本は平和な時代であるが、世界に目を向けるとまだ銃弾が飛び交い、飢餓で亡くなる多くの人たちがいると言う。我々後期高齢者は、それを体で、心で、嫌と言う程味わって来たのである。我々はその経験を生かし、世界平和の為に、今こそ立ち上がる時である。政府が名ずけた如く、確かに余生が短くとも、そんな事にこだわりなく、光り輝く高齢者として生きて行きたいものである。

大国のエゴに惑わされる事なく、貧しいながらも世界が平和に助け合って、生きて行く社会が実現する事を願うばかりである。

ボケ始めた我々の脳裏かも知れない。でも大変だったあの戦中戦後の思い出は、今も走馬灯の様に頭の中を駆け巡る日々である。

ここまで振り返ってみて、人生の終わりに近付いたとは言え、又後期高齢者と言われている、あの困難な時期を乗り越え、今生きているのである。

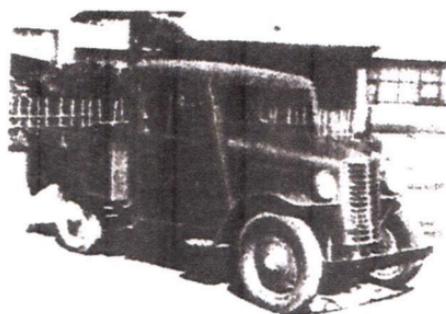
我々が経験した貴重な事柄、それから感じた心の動き、次の世代に伝えたい

事等々、生きている間になすべき事項がまだまだ沢山あるのだと思えるようになって来た。命を賭して生きて来た事を次ぎの世代に伝えて行きたい。残りの人生を先に述べた字の如く、光り輝く人生を自他共に認め合える、生涯の生きざまとしたいのである。

今までの経験を書き留めて置きたい事は山程あるが、これはその一端を書き綴ったものである。

∴ 後期高齢者よ、体を大事にし長生きして、

大いにつぶやき合おうではないか！ ∴



▲「これ何車なる」頃の木製タットサントラック（昭和14年）

一度だけお会いした貴女へ

今日は。突然お手紙などを書かせて戴き失礼致します。

私は六十八年程前に、たった一度だけ貴方にお会いして、感銘深い想いを戴いた者です。

無論、昔、昔のことですから、貴方は覚えてはおられないことですが、貴方のお話しやら優しい行いによって私は生きる勇気を与えられ、それ以来心の支えと言うか、心の基本に貴方の教えが刻まれ、今日がある者です。

それは昭和十五年の事だと記憶しておりますが、私は左足首関節の骨に結核菌が付き、所謂足関節結核に罹り、膝から下足先まで、ギブスでがっちり固定され、骨が解けた膿みの処置の為に、東京渋谷の日本赤十字病院に通院の折りにお会いした者です。

道路でお会いした時の状態を今でもはっきりと覚えておりますが、私が松葉杖を使い、青山高樹町から二十分程かかる日赤に、通院の為一人で歩いていると、カタコト、カタコトと、あのころまだ珍しかったハイヒールの駆け足の音がして来ました。

「何を急いで駆け足をしているのかな」

と思いましたが、私には関係ない事と、左足の重いギブスをぶら下げながら歩んで行くと、ピタッと、私の傍らに 貴女は止まられましたね、そして

「その足どうなされたのですか？」

と優しく声をかけられましたね。

一瞬私はびっくりして貴女の方を振り向くと、私には全然面識の無い貴女でした。

左足に巻いた白い包帯に巻かれたギブス、長ズボンに入らない為に、母が縫い目を解いてやっと履いたズボンからはみ出たギブスの足先を、宙に浮かせて歩いている松葉杖姿、誰が見ても異様で目立つ格好悪い姿ですよ。

私は不埒にも、初めてお会いした方にお話ししても、しょうが無いと思ったのですが、親切なお尋ねなので、確か次の要に口重くお話ししたのでしたね。

「中学二年の秋、走り幅跳びや、俵担ぎの早足等の体力検定が学校で行われ、俵担ぎの折り左足を捻挫し、そこに結核菌が付いて骨の関節結核となり、医者が言うには、

『直るには膝から下、足先までギブス固定で三年以上はかかるだろう。早く直

すには手術するしか無く、手術すれば体もずっと丈夫になりますよ』
と暗に手術を進める口ぶりでした。

とても三年間は待てないとので、手術して貰おうと思ってよく聞き正すと、手術とは、

『今は結核に対する薬も無く、手術とは病氣をしている足首を切断して取り去る事だが、膝下が長く残るので、義足でも日常生活には殆ど差し支え無いです』との事でした。でも私には足首を切断する勇氣はありませんでした。

医者の言う三年以上掛かるギブス治療に賭けたのですが、しばらくする中に結核菌に犯された骨が膿みとなって皮膚を破り流れ出て来ました。ギブスのその部分に穴を開け、家では処置出来ないので毎日病院に掛かり、包帯交換をして貰う事になり、今日もこれから病院に行く所です」

見ず知らずの方に、不承不承お話ししたのですが、松葉杖の遅い歩みに会わせ病院の方に歩いてくださる貴女に、有りのままをお話ししたのでした。

特効薬の無い時代で、病院で月二回程のカルシウム注射と、後は包帯交

換の治療数かなく、膿みは益々多く出て素人の私にはとても直る見込みは無い

と思った時期でした。

電車通学の学校は休学せざるを得なく、三年の休学は今の下級生が上級生になる訳で、その頃は軍隊と同じ様な上下関係の制度で、今の下級生に従う事になり、又足を切断する勇氣も無く、病院屋上のフェンスが明けられたら、飛び降り様と思っていた時に、貴女にお会いした私でした。

貴女は、

「丁度よかった。実は貴方をお見受けした時に、私の知っている人が貴方と同じ様な病氣になり、悩みに悩んで様ですが、貴方と同じギブス治療で三年半位で直ったので、ご様子から同じ病氣では無いかと、貴方にお知らせしたくて、駆け足で来ました。

長い人生です。きつと三年位の期間は取り戻せるものだと思いません。

又、この病氣を通じて他の人には味わい得ない、貴いものをきつと得られると思います。頑張って闘病して下さい。

通りすがりの見知らぬ者が、ぶしつけな質問をし、お話しを伺いました。どうか気持ちを確認りと持って闘病し、頑張して下さい」

と病院の入り口まで、松葉杖の私の遅い歩みに併せて話して下さいましたのでし

たね。

一度もお会いしたことも無い、見ず知らずの方の心からの慰めを戴いた事、私には思っても見なかったことで、大きな驚きでした。

学校の友達は三年の年月が立っても、遠くからよく見舞いに来てくれました。でも、私に関係の無い見ず知らずの他人から、あの様な慰めを戴くとは、私の心の奥に深く刻まれた、忘れ得ない初めての貴い経験でした。

『お前は、自分の事のみを考えて、不幸だとか、死にたいだとか、他人にどれだけの事をしたのか、他人というものを考えた事すら無かったのでは無いか』と自らの心に強く問いかけられた出来事でした。

聖書に『愛は己の利を求めず』と書いてあります。自分の事を考えない行為の中に、本当の愛の行いが有るのだと、改めて思いしらされる者です。

そして幸いなことに、貴女がお話し下さった様に、三年程して膿も止まり、患部に負担をかけないで歩ける、編み上げ式補助機を特注し、歩ける様になりました。

補助機と言えば、私が朝なんとなく目を覚ますと、母がダンスの中から、紙

に包まれた着物を出して居るのを薄めで見てしまいました。治療費の事等一言も口にしない母でしたが、あれはきつと私の補助機の代金工面の為に、質屋か又は売りに出したものだと思えます。健康保険制度等無い時代で、補助機と言えども結構高かった事と思われまます。私は身内の者の愛にも恵まれた者でした。徴兵検査はその補助機を着けたまま受けました。

老徴兵検査官の一言は、

「丙種合格とする。銃後で確りとお国の為に働いて欲しい」との一言でした。

甲種又は乙種の合格では、殆ど兵隊に取られる時代でした。戦況は日本に不利な時代に入っていました。南方に取られれば撃沈され、北に取られれば、シベリヤ送りになっていた可能性も高い時代でした。その意味では戦地に行れぬ私は、足の病気によって命救われた者でした。

そしてしばらく経って、自分の足で歩いて良いと医者から言われ、父が買ってくれた太い杖に殆どの体重をかけ、左肩を母に支えられながら、夕方の人通りの少なくなつた路を、五十メートル程歩けた時の嬉しさ、生まれて初めて歩けた様な思いと、喜びでした。

秋の肌寒い季節でしたが、額には汗が一杯になって流れていました。

でも、自分の足で歩ける喜びが、こんなにも大きかったのかと、二十歳を過ぎた私に蘇って来ました。

病を得たお陰で味わうと貴いものでした。

戦局はガダルカナルが落ち、アッツ島、サイパン島等の玉砕の報が入り、友達はほとんど戦地に取られて行きました。兵隊に行けぬ私は、出征兵士を送る歌声を聞く度に取り残された悲しみと、自分の不甲斐なさが身に染みてまいりました。でも、

『銃後で、確りとお国の為に働いて欲しい』

との老徴兵検査官の言葉が胸の片隅でうづく私でした。

それで、工業学校を遅ればせながら卒業し、軍用飛行機のエンジンを作っている、静岡県富士市の軍需工場を選んで、生まれ住み慣れた東京の地を一人離れ、就職致しました。

完成したエンジンテストの鳴り響く騒音、回転するプロペラから出る、人を寄せ付けぬ風の強さ、工場に響くそれらの騒音や強さの中に身を置くと、せめてもの戦地に居る友達との交流だと、心を慰める日々でした。

そして間もなく終戦を迎えてしまいました。その後軍需産業から変わった自動車産業で、無事定年を迎える事が出来ました。

ギブスで三年補助機で三年治療した左足は、今では歩くに何の支障もなく、両足で大地を踏み締め、健康の喜びに慕っております。

あの時私に追いつく為に、駆け足で来られたハイヒールの甲高い音、すれ違う人の眼などかまわずに、私のぎごちない歩みに寄り添って、慰め、励まして下さった言葉、行動等々。

自分の殻に閉じこもって死にたいと思っていた私に、他人の存在を教え、そして本当の愛を教えて下さった貴女の響きが、心の眼に、耳に、今も変わる事なく輝いております。

貴女に助けられ励まされてから六十八年、私も早八十の大台に入り四年も過ぎました。あのお会いたした時の推定年齢から、百歳近いお齡になられたのではないかと推察致します。

東京であの時一度だけお会いたただけで、お名前もお住まいも知らない者で、もう貴女にお会いする機会は絶無と思えます。

この手紙を貴女にお渡しすることの出来ない事は、百も承知しておりますが、

私が生きている間に『どうしてもお礼を言わなければ、死にきれない』と書かせて戴きました。

現世でお会い出来なくても、きっと神様のお助けを戴き、彼の地でお会い出来る事と想います。その時きっと、きっと、この手紙をお渡し出来るものと信じております。

本当に、ありがとうございます。

歩 み

今日も生きている 限りある人生

悩みも苦しみも そして喜びも私に襲いかかる

でも 一瞬の与えられた喜び

自分が他人から愛ヒトされている喜び

自分も他人を愛せる喜び

人生の中の幸せって

こんなものであるかも知れない。

他人が私を愛してくれた様に

自分がどれだけ他人を愛しただろうか

他人の愛の中に 私は本当の愛を知った

長い人生の中に 一瞬の出来事の中に

私は幸せを与えられていた

私は歩み続ける 弱い弱い歩みであっても

あの受けた幸せを 私はまだ返してはいない

今日一日の歩みの中に 心として言葉として

少しでも返せる 私の一日でありたい。

—

涙腺

悲しい時には思い切り泣け、それが気持ちをすっきりする事だ、と教わって来た。

先日の朝日新聞に終戦直後の思い出として、ソ聯が攻め込んで来た旧満州での引き上げで、共に連れて来た牛を食料として殺すようにロシア兵に言われ、一頭の牛を座らせロシア兵が眉間を銃で打ち殺ろし、他の牛の処分を迫らせられると、それを見ていた他の牛は涙を流しながらおとなしく座って殺されて行った。と敗戦の悲しき思い出の記事が出ていたが、畜生と言われる牛達でも、自分のおかれた運命を知り、悲しみを知って涙を流すのだと、私の涙腺も溢れる思いで読んだのであった。

私も歳のせいかな涙腺が弱くなつたのかも知れない。いや、自分では感情が豊かになつたのだと慰めているが、大変だった戦中戦後、多くの友達を失ない困難をくぐり抜けて生き残つた者として、物事に素直にありのままに向き合えることを喜んでいる。

「眼圧二十です。でも正常眼圧緑内障です」眼圧は十から二十が正常眼圧だと言う。でも脳に行く神経が多少切断されているらしい。目医者から戴いた目薬で眼球から出る水分の出口は広がったようだが、涙腺が弱くなって涙が出てても眼圧には関係ないものと勝手に納得しているが、如何なものなのであろうか？　でも人間として泣けない人間にはなりたくはない。悲しい時には思い切り泣いて生きて行きたい。人が笑おうと、さげすもうと、私の心の感性の一部を表す涙線の働きを、そのままに生かして生きて行きたい。

昨今悲しき事件が頻発しているが、子供も大人も動物を含め、共に生きる命を大切にする世の中にする為に、私にそのような文章が書けたら、どんなに素晴らしいことかと思う。そして私の涙線を、少し穏やかに休ませてやりたい昨今ではある。

忘却の彼方

雨が二三日続くと、カラット晴れた太陽が恋しくなるものである。太平洋側の比較的恵まれた地に居ながら、やっぱり太陽は恋しくなるものである。普段あまり気にもしていない太陽、空気と同じく我々になくてならぬものがありながら、私にはあまり気に止めぬ存在であった。

昭和三十年前半に登場した、太陽の季節・狂った果実・逆光線などそれまでの常識に挑戦した、太陽族の映画であり時代を先取りするものであった。戦後の疲弊からようやく逃れて、神武景氣が始まり、女性の服装がいわゆるラッカサンスタイルとなった頃である。中村好夫をして「もはや、戦後ではない」と言わしめた時である。デモに明け暮れた戦後の『雨の季節』から「太陽の季節」に変わる時でもあった。

窓のガラスを濡らす雨を見ながら、ふと石原裕二郎の「太陽の季節」を思い出し、太陽に興味が湧いて来たのである。

物理的に太陽とは何か？ 文献その他で太陽を調べてみる内に、私の眠気はすっ飛んでしまった。太陽の表面温度は六千度であり、中心部は核反応で千五

00万度に達しており、これから五十億年は燃え続けるとの事である。水の沸騰する温度100度しか我が家に存在しない者に取って、想像出来ぬ温度である。そしてその直径は地球の109倍、月の400倍もある怪物である。太陽までの距離は、ジェット機で十七年、新幹線で六十八年かかるとのこと、気の遠くなる様に離れていても、我々にあの暖かな日差しを与えてくれているのである。それにさらに驚くべき事は、地球に達するエネルギーは二十二億分の一でしか無いと言う計算である。

我々常識である日常計算の桁の、また一桁外れた数値である。自然の計り知れない膨大な姿である。

こんな常識外の大きさに触れてみると、逆に小学校の頃、物を切っては、切っては切って行くと、どうなるのだろうと疑問に思っていたら、切り終わりは原子になるのだと教わっていた事を思い出した。

原子と元素の違いを説明するのに解らなくなった私の年代になって、先日工業新聞を読んでいたら、タンパク質の研究に使う単位としてナノ（nm）の世界を説明しており、興味を呼び起こすものであった。

十億分の一メートルと言う極小のナノの世界の研究も、驚く程進んでいるこ

者である。

人も枯れる時がある。あのか弱き花の何十倍の命があったとしても、死は訪れるものである。人において永遠の命とは何なのであるか？ 家、財産を子孫に残すだけでは、余りにもお粗末なもの様に思える。人における残したい花卉とは一体何なのであるか？ 神様が私たちに与えてくださった唯一の花弁とは、真実の愛の心であろう。

ここまで書いている時に、テレビでは小学生が同級の小学生をナイフで殺すと言うシヨキングなニュースを報じていた。完全に死んだかどうか血を流す相手を揺すってもみた様である。子供心に生じた憎しみが、感情が、一言の言葉が、人の命を奪うと言う前代未聞の事件を起こしてしまったのである。

我々は華やかな科学文明の上に、心の問題を忘れ去ったからでは無かろうか『忘却とは忘れ去ることであり、忘れ得ずして忘却を誓う悲しさよ』君の名はの名台詞で、この放送の時は銭湯の女性風呂ががら空きになったと言う言い伝えがあった程である。忘れ得ぬ人を忘れなければならぬ宿命。誰でも持ち得る経験であり感情であるかも知れない。人が人を愛する、人を恋する、これも

自然の行いであるかも知れない。嫉妬する感情、怒る感情、失望する感情、歓喜に満ちた感情、人を許せる喜び、我々の心の中に渦巻く日常の出来事である。小さな事かも知れない。些細な事かも知れない。先の天文学的数値から見たら、ゴミのゴミであるかも知れない。自然の大きな流れの中で、笑ってしまう程のささやかな事かも知れない。些細な日常の心の動きである。この巨大な宇宙の時空間の中で、人の心の動き等馬鹿げた事かも知れない。

でも、期待していた二十一世紀を迎えても、人のエゴ、国家のエゴの為に、鉄の弾丸を使い爆弾を使って、人が人の命を虫けらの様に奪っているのである。生きとし生けるものは太陽の恩恵を受け、野の花の美しく咲くこの恵まれた地球と言う環境の中で生命を保っている。そして動物達は与えられた意識を持ち、喜怒哀楽を素直に表現している。

去年来たツバメは、又せっせと巣作りを励んでいる。去年の恵まれた所を忘れずに、愛の巣を作っているのである。翼長10cm程のツバメが何千キロ離れた南洋諸島から忘れずに帰って来るのである。雨風が吹き荒れ、外敵の恐れもある外洋を渡り、あの小さなツバメが、なぜ昨年巣作りした小さな一戸の軒先に戻って来るのであろうか？ 子を守るに最も安全な場所として帰ってくる

のである。

宇宙の途方もない営みの中に、恵まれた地球の環境の中に、可憐な野の花やツバメさえ、恵みを謳歌し美しく装おい嬉々と生きている。

ナノの世界まで入り込む知能を持った人間が何故戦いをするのであろうか。何故人を殺し合うのであろうか？。肝心なものを忘れ去っているのでは無からうか。犬でさえ飼い主を覚えている。飼い主を見る目は暖かさにあふれている。両親のあふれる愛に、取り巻く人々の暖かな眼差しに、育み育てられた者も、自ら人を傷つけ戦う事になるのであろうか？

人のエゴが、国のエゴが、物質の欲望が、人を殺し戦いをしてまで獲得しなければならぬものなのだろうか、多量破壊兵器が有ると言う触れ込みで始まったイラク戦争が、多くの市民や日本人まで犠牲者を出しながら、その兵器は見つからず、石油資源の獲得が目的なのだと言われられる現状を見せつけられている。地球の壮大な自然界の営みの中で出来た石油資源、特定の人々が作ったのでも無く、まして国が関与して出来たものでも無いこの資源は、地球上に生きとし生けるものが共通に与えられるべき恩恵物だと思う。有限なるこの貴重な資源こ

そ、国連当たりで管理すべき物では無かろうかと思ふ者である。

忘れてはならないもの、神から与えられた愛の心を、太陽の恵み、自然の暖かさ豊かさ、可憐に野に咲く花に心開き、もっともっと自然に目を向け学ぶべきであろうと思えてきた。『忘却とは忘れ去ることであり、忘れ得ずして忘却を誓う悲しさよ』些細な小さな心の叫びかも知れない。でも私はこの言葉の中に心の真実と、忘れてはならない大切なものを、秘めた言葉の様に思えて来た。

梅雨の雲間に漏れる、柔らかな太陽の日差しを浴びていると、忘却の彼方に人の忘れてはならない宝物が在る様に思えて来た。

雨あがりの虹が、そう私に語りかけていた。

忘れ得ぬ ものごと。

ごしごしと鯉節を削る音で我家の朝は始まる

小さくなつた赤身の鯉節、 かなの上を走らせる

熱湯に入れて散って行く鯉節

たらいに浸かつた洗濯板の上を

石鹼を付けた下着がしごかれる。

冬の冷たい朝 母の手はあかぎれていた

小判型をした風呂桶の中に、 鑄鉄の釜が鎮座ましましている。

蒔き割りの音が、 隣近所からも聞こえてくる。

生乾きの蒔きから出る白い煙、 火吹き竹に涙がぼたりとおちた。

すいとんを練る配給のメリケン粉は少なかつた

一並びのふかし芋、食べ盛りの僕ら子供達

食べた振りする、母の口には入らなかつた。

白いさらしに 赤糸の結び目が少しずつ増えて行く

息子の無事を祈り 道行く人にすがる婦人

千人針の 結び目は堅かつた

一面の焼け野が原

防空壕の上の焼けトタンが動いた

中から母と弟が出て来た。

物は無くとも、心はしっかりと結ばれていた。

華麗（加齡）なる想ひ

華麗なる想ひ。

なんとなく華やかで、ロマンチックに富んだ言葉である。そしてその想ひは、社交性に富んだ、豊かな華やかなる雰囲気と、希望あふるる、豊かなる心に満ちている様に思える。次代を託したい、あこがれに富んだ想ひである。華やかな社交ダンス等を連想さす想ひでもあり、青春から成人の多く者が、抱く想ひであらう。

加齡なる想ひ。

何となく、避けて通りたい言葉であり、思いたくない言葉である。そして社会を巡り来った、豊かなる経験を元にした想ひではあるが、多少頑固な一面を持つて、他者の入居るすぎがない雰囲気でもある。経験から発する思ひは、なかなか曲げがたい想ひである。そして次世代に、その経験を託したい想ひを、多分に含んでいる様に思う。

日本語はまことに面白いもので、上記二つの言葉を発音するのに、区別が出

来ないものでありながら、意味はだいぶ異なっているのである。上記二つの言葉に対する意味付けは、別に字引を引いたものでもなく、私の勝手に付けたものであり、人それぞれに意味付けは異なると思うし、それはその人の置かれた環境によって、大きく左右されるものと思う。そして私は、華麗プラス加齢なる思いに憧れる者である。

天は人に二物を与えずと言われている。欲張った思いかも知れない。そして喜寿を過ぎた私は、加齢（華麗とも思いたい）なる思い、であるかも知れない。でも華やかさに憧れる心と共に、また次世代に、思いを馳せたい気持ちが強いのである。



まず第一に思うことは、最近私の心の中に、変化が生じて来たものを挙げたい。

一言で言えば「せっかち」になったと言えるのかも知れない。

でも自分の心の中では、「せっかち」とは思っていない。

具体的に例を挙げると、これはすべきだと思うことは、まず《今日出来ないか》と思う事が強くなった事である。もう少し若い時は、《まあ明日があるさ》

と比較的呑気に構えて居たのである。それを今日差し支えなければ、実行することにしたのである。

明日でも良いものを、今日行ふということは、確かに「せつ」に見えるかも知れない。でも私に対する、明日への保証はないのである。齢を重ねたから、その思いが増えたのかも知れない。でも、若いと言っても交通事情等を考えると、やはり明日への保証はないのである。

たまたま先日墓参の為、私の乗った東京の市営バスが、事故を起こしてしまった。半年に一回位の東京参りが、事故の渦に巻き込まれてしまったのである。

バスの事故は、今までに私は経験した事はなかったのであるが、サイドミラーを、曲がりかけて停まっていた、トラックの荷台の角にもろにぶつけて、がちり固定されているミラーとその支持部を、粉々に壊してしまったのである。

一瞬大きな音がして、運転席のすぐ後ろに乗り合わせた私は、運転席のあの大きなフロントガラスが粉々に割れ散り、乗客に当たったと思ったのであるが、幸いサイドミラーが壊れただけで、怪我人はなかったのである。自分が運転しているのではなく、安心しきって、バスに身も心も託しきっていたのに、突然の大音響である。一瞬の恐怖心が私を襲っていた。でも、その一瞬が過ぎ、フ

ロントガラスが壊れていないのを確認すると、ほっとした気持ちに戻っていた。でもバスは代替え車を呼び、お客はそれに乗り換えて用を足したのである。

一般的に慎重な運転者が多いバスであるが、私の乗っていたバスが事故を起こした事は、私の安易な気持ちをおち破るもので、貴い経験であった。やはり明日は保証されて無い、と言うことを身をもって経験し、私に必要な大きな一つの示唆を、与えてくれていた。



第二に想うことは、『人を愛する』と言うことである。

これは加齢ではなく、華麗に属する事かも知れない。いややはり華麗プラス加齢である。「愛」と言うと、よく人は「恋」と同意語に感ずる人がいるが、字引を開いて見ると愛とは「相手のしあわせや、発展を願う暖かい気持ち」と出て来た。聖書のコリント前書にも「愛は己の利を求めず」と出ている。一方「恋」は同じく字引を引くと「男女の間で会いたいと思う強い気持ち」と出て来た。そこには自己が厳然として存在しているのである。

自己否定と自己存在との違いである。自己否定は非常に難しいことである。電車に乗って、お年寄りに席を譲ってあげる事は、比較的自分自身に抵抗なく行

われる事である。でも道を渡っている目の不自由な方の手を取ってあげる事は、私には抵抗がある所である。大勢の人の目を乗り越えて行う事は、やはり勇気がいるのである。何となく恥ずかしいと言う気持ちがある。そこには自分がやはり存在するのである。

この小さな行為の中にも、自己を否定し得ない弱さがあるのである。

でもそれを乗り越えられる所に、本当の愛があり、どんなに小さい事であろうとも、自然に真に人を愛せられる事こそ、本当の生きがい、おのずと生ずるのだと思う。

NGOで、後進国の人々の為に、身を粉にして働いている若い人々、近ごろの若い人々は『えらい』と、私は言いたいのである。

人生の中の貴重な数年を、求めている人々に捧げる貴さ、これより大きな愛は無い様に思える。我々の若い頃は、自分の命は返り見ないと言っても、憎み合い、人を殺し合う戦争に人生を託した事を思えば、物質的に恵まれなくても、人を愛し、その中に生き続ける事ができれば、人として、どれほど価値の有る生涯であったと、感ずることが出来ると思う。国のためとは言え、敵を憎み殺す人生の価値観から、人を愛し共に生きる価値観へと、我々から見たら、一八

○度の転換である。

後進国のやせ細った子供達をテレビで見る度に、同じ人間として、飽食の中にいる日本人として、何もなし得ない自分を、不甲斐なく思うのである。我々のおかれて居る平和を、全世界に及ぼし、大事にしたいものである。『人を愛する』と言うことは、『己』が無いと言いながら、目には見えなくても、また望まなくても、結果的にはいろいろな形で、自分に幸せとして、帰って来るものの様な気がしている。

『人を愛する』とは、その華やかな響きの中に、己に科する重さと、きつく辛い事も多い事と思われる。でもそこに、心に計り知れない、大きな喜びとして、生きて行きたいものである。

◇
第三に想うことは、『生き甲斐』と言うことである。

定年を過ぎた我々は、時間的に余裕がある様で無いのである。

確かに会社勤めと比べれば、自分でコントロール出来る時が多いのである。従って怠けて居れば、極端に言えば、一日中何もしないで、寝て居る事も出来るのである。つましくして居れば、年金で何とか生活出来るのである。父や母な

どの年金制度など無い昔の人の苦勞を思うと、正に罰が当たる思いである。

昔私が小さかった頃、《眠り人形》と言うのが我が家にもあった。

起こすと乳首をくわえ、寝かすと青い眼を閉じるのである。そして可愛い顔をして、我々を慰めてくれていたのである。人形としてその目的を立派に果たしていたのである。

私には人形に対抗する、美しい目も顔も無い。可愛らしきも無い。何をもつて私の『生き甲斐』とすべきなのか。

体が動けるのに何もしない。頭がまだ使えるのに何もしない。回りの人に暖かい言葉も発しない。これではひいき目に見ても、自分として

『生き甲斐』を感じずる訳に行かないのである。せめて動ける間は、多少でも考えられる間は、生き甲斐を求めて自分を叱咤激励したのである。

最近流行のボランティアにでも参加出来て、自分の持てるものを發揮出来たら、大きな生き甲斐になるのではないかと、思い巡らす日々である。わが家の近くの海岸を三十分程歩いてみても、空き缶やらゴミが結構落ちていたのである。きれいにされている所に、ゴミを散らす人に腹だたしい思いをすると同時に、毎日黙々とそれを拾い、道端の雑草を抜いている人々が居り、その人に会うた

に頭の下がる思いがする。私も小さな事で良い『人の為になる、生きがい』を求めたくなる思いである。体が動けなくても、頭が働かなくても、その人がそこに居ると言う事だけで、皆が慰められる様な、そして皆から慕われる様な『生きざま』が作れたら、最高の人生では無いかと思うのである。意気張る事なく、存在感のある人間になることを目指すのが、私の理想の最高の『生き甲斐』ではないかと思う。私には非常に難しいことであるが、その為に第四の思うことを、頑張らねばならぬと思うのである。

◆ ◆

第四に想うことは、『己を鍛えること』である。

昔よく五十の手習いと言っていた。私はそれに対して、三十年近くもオーバーしている。昔の学説では、歳を取ると脳の細胞が一日何万個と死滅するのだと言われていた。だから脳みそが小さくなるのだと言われていた。でも最近の学説によると、磁気共鳴装置等で、脳の仕組みを細かく計ることができ、脳の使い方次第で、減るのではなく、増すことも有り得ると言う発表がなされた事を聞き、大いに心休まる思いである。最近110万部の売れ行きのベストセラーとなっている、聖路加病院名誉院長の日野原重明先生の『生きかた上手』

を拝読する機会があったが、九十才を過ぎた方なのに、新しい在り方に挑戦する意欲と、学習する力の強さと、またそれを実践される強さに、敬服せざるを得なかった。練達と言う言葉がある。年を取って円満な穏やかな言葉を吐くと、「心が練れておられますね。」等と半分お世辞の様な言葉が帰って来る。

でも、何事もまあまあ許すと言う事よりも、悪いことは悪いと言える勇気を鍛え持ちたいものだと思う。白でも黒でも良い様な事で争いたくは無い。でも自分の良心に従った強さと、発言をなし得る自分でありたいものと思っている。私をまだ、鍛えがえのある年寄りだと想いたいのである。

頭を鍛えるつもりでも無いが、私は買って1年以上ほったらかしてあったパソコンを、子供の勧めで使い出したが、豊富な機能に付いて行くのに悩む毎日である。でも最近の男子の寿命平均年齢が七十四、五才とか出ていた。その歳を過ぎたとは言え、昔の五十才の寿命から二十五才も増えているのである。私もあきらめずに、鍛え直す事が必要と、私なりに取り組んで居る所である。これは慌ててノイローゼにならぬ様に、急がずあわてず、自分のペースで進めて行きたいと思っている。趣味的には、体も何とか動ける事であり、頭もまだ今朝のご飯位は覚えていられるので、何か趣味をもって「己を鍛える一環とし

たい」と思っているが、自分一人で楽しんでいるだけでは、何となく物足りない気がするの、まだその趣味に、真剣に打ち込めてないからだろうか？

自分が今まで行って来た技術を、もう一段鍛え直して、何か役立つ事が出来たら、もっと生きがいを感じるのでは無いかと、ちょっと変わった歯車を頭の中で組み立てて、夢の思いを巡らせている現在ではある。

体を鍛えると言う意味で、会社を辞めた四月から朝の散歩を始めたが、自分でどのくらい続くかと、自分を試す意味も含めて取り掛かったが、何とか半年続いているのは、まあまあが出来であろうと、自分を評価しているのは、少し甘い点数であろうか？

私ぐらい歳を取ると、回りの人は遠慮して、あまり忠告してくれないので、自分で自分に試験を課して、自分で評価するのが良いのかと、思う様になって来た。まさに自分による、自分に対する試験であり、自分による評価であり点数である。多少甘くても、多少きつくても、これが一番私を鍛えるに、良い方法の様に思えて来た。



第五に想うことは、私は子や孫たちに、何が残せるかと言う事である。子供

は親の後ろ姿を見て育つと言うが、私の後ろ姿は、戦争の中の姿であり、我武者羅な戦後の生きざまであり、その意味では、到底子供や孫たちに残せるものではないが、日本がそして多くの人々が払った犠牲の中に感じた事を、つたない文章に託して、子や孫たちに読んで貰うのが、この世に生かしてもらった私の、務めでは無いかと、エッセイ等に託して書いているのである。語り切れない思い、表わし得ない思いに、齒軋りする者であるが、駄文に託してでも、残してゆきたいのである。

子や孫に残す財産として、私の心の総てを、語り尽くしたいのである。そしてそれしか、私には残せるものは無いのである。その為に私はもっと感性を、鍛えて行きたいのである。もっと書いて行きたいのである。私の心に感じた真実の姿を、人々の貴い善意の姿を、そして人として持っていなければならぬ、私たちの心を、少しでも伝えて行きたいのである。

この美しい地球に生を受けたものとして、人として、人間として、どの様に生き、どの様な心を持つべきかと、子や孫たちに、思考しそして実行して貰いたいのである。

◇
◇
人が人を殺す、あの忌まわしい二十世紀に大半を生きた者として、二十一世紀に生きる子や孫たちに、誤りの無い人生を、送って貰いたいのである。

…
その祈りや、切なのである。
…

人に何かをしてあげるといのは、

簡単なことではありません。

時にはただ見守ることの方が大切な場合もあります。

相手の心を知るには、謙虚さ、そして愛が必要です。

It is not easy to do something for someone else.

It is sometimes better to simply just watch.

In order to understand someone's feeling,

having modesty and love is necessary.

枯れ葉

小さな芽吹き 出来たとき お前がこの世に誕生だ

緑の奇麗な餅肌で しっかり枝に捕まって

太陽一杯吸い込んで 緑の森になったんだ

雨が激しい深夜にも 嵐の風が吹くときも

お前はじっと耐えぬいて 優しい光り待っていた

緑の葉っぱを繰り広げ 光合成繰り返し

お前の務めをやり遂げて 立派な葉っぱになったのだ

木枯らし吹く世に 季節が移り

緑の色も色あせて お前の務めが終わるとき

風に任せて一人降り 重なりあって地の上で

土の温もり感じつつ 仲間と話ししてるかい

宇宙の遙かな時の中 お前の一生思うとき

塵芥ではないよな 枯れ葉っぱ

お前の立派な一生だ 私はお前が大好きだ

80歳代の悟り

「おいおい、そんなに亀をいじめては可哀想ではないか」

「おじさん、亀の尻尾をもって持ち上げると、足をバタバタやって面白いよ」

「そんなにいじめては可哀想だよ。おじさんが買ってやるから亀をおよこし」

と子供にいじめられている亀を、お金をやって助けてやって、海に逃がして

やった浦島太郎に、しばらくしてその亀が現れ、恩返しにと竜宮城に連れて行っ

て貰った太郎。奇麗な乙姫様に会い、御馳走や歌に踊の歓迎で、月日の経つの

も忘れ3年経ってしまった。

ある日ふと故郷を思い出し、亀に送られて元の浜に戻ってみると、300年

の歳月が経っていた。

辺りは前と全然異なり、知っていた人もおらず、寂しさのあまり乙姫様から、

開けない様に言われて戴いた玉手箱を開けてみると、白い煙りが立ち昇り、浦

島太郎はたちまち白髪のおじいさんになってしまった。これは私がまだ子供

の頃、日本の童話の一つとして『浦島太郎』と言う話があって、母に聞かされ

た事を離げながらも覚えている筋である。動物報恩、神界行き説話の日本的表現として『万葉集』にも「浦島の子の話」として、昔から伝えられている伝承童話である。

その他、『花咲かじしい』『桃太郎』『こぶ取りじいさん』等、我々には忘れ難い童話として、記憶の隅に残っている。

『今年には私達も数え年で80歳の大台に乗り、「老いる」と言う事が、人生最大の課題と考える様になつて来ました。』……
と言う見出しで、今年も小学校同窓会の案内状が来た。昨年は私も65年ぶりに出席した青南12会の集まりである。私は終戦間際に東京を離れて一人静岡の地に来た為に、昨年まで物故者ならぬ行方不明者の一員として載っていたが、ひよんな事から私の消息が分かり、『今年もクラス会として30回目を銀座で開く』との招待状を戴いたのである。

昨年に続き出席すると、前年より1名少ない出席人数であり、しかも出席者14名の内2名の者が、奥さんの付き添いで出席している。まさに「老いる」を考えざるを得ない状態なのかも知れない。

咲き誇っていた桜の花も散り、自分の年を思わせる招待状を戴き、老いた友の姿を見て、ふと浦島太郎が故郷を思い出した様に、私も前記の童話を思い出したのである。

私と同じ年配の方々の計報を時々耳にする時、涙に帰った浦島太郎の心境を、私も判りかけているのである。戦中戦後のあの苦しい時代を共に生きて来た仲間である。比較的呑気な私でもセンチメンタリズムになるのである。若い時には思っても見なかった寂しさ。話相手が、一人ずつ欠けて行く寂しさの实感を、感ずる歳となったのである。

私もあの乙姫様から戴いた禁断の玉手箱を、開けてみたい心境になるのである。

12時間歩き続け足が棒になった天城連峰の縦断、バスの温度計を見ながら氷点下の全面結氷を願った、精進湖でのアイススケートツアー、夢にまで見た自分の車でのドライブ旅行。：

年よ戻れよと、玉手箱を開けて、若き日の夢よ再びの想いである。

でも一方私は、自分が戸籍に記された年齢になったと言う、自覚はないので

ある。山にも登りたい、ボーリングもしてみたい、若い人と意見を戦わしたい、頭が白くなっても、老人健康保険証を貰っても、まだまだ気持ちは50歳台と思っている。(へそう言っても医療費は老人並で支払っている。)私を置いて行った亀さんをもう一度探して、竜宮城に戻してもらい、若い人たちとスケアーダンス位は、踊ってみたいものと思っている。

最近性同一性症候群とかで、戸籍上も男が女に、女が男に変えて貰える法律が出来たと聞いている。それだったら戸籍年齢を身体状況に依じて、若く変えられるものなら変えて欲しいものである。インフレの貨幣単位も、デノミネーションで一挙に切り下げられる訳だから、年齢を切り下げても不合理では無い様に思えて来た。これは私だけの突飛な願望であり、老いた者の夢なのであるか？

不老不死の薬を人類は昔から求め続けている。でも未だ見つかったと言う情報は一つも入って来ない。ノーベル賞を貰った偉い学者さんも、将来その様なものが出来るとは、一言もおっしゃってはいない。

なぜDNAの存在すら知らなかった大昔の時代から、神様は人間にだけ「死が必然である」と知らしめたのであろうか？死後の準備をさせる為に知らしめ

たのであろうか。動物の様に死を知らぬ生活の方が、呑気で良かったのではな
かろうか？

人間の眼の網膜には、凸レンズである水晶帯を通して、眼の前の物体が逆さ
まに写っている訳である。それを人間の意識で正常に戻して生活している。其
の証拠に日本3景の一つである天の橋立を、股のぞきで覗いて見ても、借金取
りが来ると言って、逆立ちをして回りを眺めて見ても、上は上である。まさに
意識は天上天下を司る優れものである。

一個の肉体が滅びる死と言うものを、それを恐れおののか、寛容して受け
入れて行くか、我々の意識にかかっており、「老いる」を取り上げた同窓会の
諸君と、じっくりと考えて行きたいものである。

植物は花を咲かせ実を結び種を作り、そして本体は枯れても、また土から新
しい生命として生まれて行くのである。

DNAと言う遺伝子を通じて、肉体的にはちゃんと再生されて行くものであ
る。考えて見れば、自然界は当の昔から肉体的不老不死の仕組みを、ちゃんと
備えてくれているのである。それでなければ、生命の歴史40億年の昔から今

日まで、我々人間は存在出来ないものであると感じている。ものを考える脳みそも、見る眼、聞く耳、しゃべる口、そして手足もちゃんと整えられて、受け継ぎ与えられているのである。

そして受け継ぐ智識は、物質文明の上に、又本等を通じ、各種機器を通じて現在の我々以上に、解明され発達させられて行くものと信じている。

ただ私が死なせたくないもの、滅ぼしたくないもの、DNAで伝えられないものとして心配なのが、人の心であり、愛の心である。

最近政府が教育基本法として、君が代を歌わせ、国旗掲揚を義務づけ、さらには基本法を改正して、国を愛する教育を高揚しようとしている事である。我々の世代の若い頃は、徹底した愛国心を教育されて来た。

肉体的な死をも恐れない愛国心であった。

それが人類に幸せをもたらしたとは、到底思えないのである。

我々の若い時代は、友を死の戦場に送り、愛する夫を、子供を、死に追いやったのである。相手を殺すか、自分が死ぬかの争いである。

人間が作った武器で弾薬で、果ては非武装の市民も差別なく焼き殺し、『国家の為に』と言う、たった一つのスローガンの為に、死人の山を築いたのである。

時の流れに身をまかせ

『時の流れに身をまかせ』私には嫌な言葉である。大勢に従う。長いものには巻かれる。日和見主義。そして身を守るに一番安全な考え方かも知れない。でもいやな言葉ではある。何となく嫌なのである。

なぜ嫌なのか？と問われても、やっぱり嫌なのである。強いて言えば、そんな考え方で改革は出来ないし、進歩は望め無く、権力のある、力のある者たちの世界になってしまふからだ。とても言うしか無いのかもしれない。もしかしたら、心の何処かで命をかけた明治の改革者たちにより、日本が封建時代から近代化に転換する偉業を果たした事に対する、憧れが存在しているのかもしれない。二、三代先人のたぎる血潮が、私の中に生きているのである。何となく嬉しくなつて来た。

さて、日本は昭和二十年八月十五日に敗戦を迎え、軍国主義、現人神から、民主主義に変わったのである。日本人が勝ち取った改革では無いかも知れない。いや無いのである。でもそれが『時の流れ』になつたのである。敗戦前私は現

人神の國を守るため、自分の命など惜しくは無いと心の中で本当に思っていた。日の丸の旗を襟にかけ、全校生徒の前で予科練に志願して行った友達が、憧れの的であった。それは日本人として当たり前前の気持ちでいたし、何の疑問もため自分であった。およそ『時の流れ』等意識して生きて来た人間でなかったのである。そしてその後も敗戦で与えられた平和新憲法の元に慣れ過ぎて、心が眠っているのかもしれない。そんな私でも最近憲法改正が叫ばれ出したり、有事防衛が叫ばれ出したりすると、戦争の悲惨さを体験して来ている者として、此処らでそろそろ眼を覚まして、このまま『身をまかせ』ていて良いのかどうか、多少気になる所である。

そして心に引掛かる古き事柄として、私がまた小学生の頃、地理的にも非常に近くに起こった事件であり、軽飛行機から反乱兵士鎮圧の為に蒔かれた『兵に告ぐ』のビラ配布を目の前に見た「二、二六事件」への遭遇。へんか

らでも遅くない……との書き出しの、原隊復帰を促す文面が今でも私の心の底に鮮明に焼き付いている。この事件で暗殺にあった者や、銃殺の処刑にあった者が大勢いたが、『時の流れ』を変え様とした、彼らの主義主張も明らかにさ

れず、葬り去られた時代であった。暗闇の時代であり、軍部はそれを『時の流れ』と、戦争拡大に利用した事である。

五年程前は自分史らしきものを書いて、小さな自分の『時の流れ』を振り返って見ようと思った。その流れの中で、私が成長する節々の一つ一つに親の愛があり、そしてその傍らには、必ずと言って良いほど、家庭の、そして見ず知らずの人の愛が、私を生かしてくれていた。長い病気で死にたいと思っていた時に、他人のかけてくれた一言が私の眼を覚ましてくれた。自分だけで生きているのでは無いと、回りを眺め共に生きる眼を、その『時』に与えてくれた。三年間の闘病生活は、私の小さな心に本当の愛を教えてくれた、大切な『時の流れ』の一齣であった。

戦後の物も食物も極端にない時代に、薬入りパンで空腹をしのぎ、資源のない日本が米代を払う外貨を稼ぐために懸命に働いた日々。ここらで会社勤めも終わったなら「寝坊したい時には遠慮会釈なく寝るとか、自分の自由な時間をそのままに送るとするか」と心の中で密かに思っていた矢先『時の流れに身を任せ』等と、気ままにしているには居られない身近なニースを仕入れてしまった。

それは、最近研究されだした「体内時計」なるものの情報である。体内時計なる遺伝子を我々は先祖代々そのまま受け継ぎ、また伝え様としている事である。お腹かが空いて来ると「腹時計が十二時だ」等と言っていたが、本当に動物は「体内時計」を授かっているらしい。そして、一日二十四時間の体のリズムを司どっている。朝の目覚め、昼の食欲、夜の睡眠、等々毎日の生活リズムを、規則正しく保っていてくれるものであるらしい。

でも、でもである。我々が受け継いだその「体内時計」は、どこでどう間違ったのか、一日が二十五時間なのである。地球のリズムと一時間の時差を生じてしまっている。もし我々が、『時の流れに身を任せ』とばかりに緩じ込められた部屋に呑気にしていると、逐次ずれていって、目覚めの朝がやがて暗闇の夜の時間になってしまいうらしい。体内時計なる現物は眼と耳を結んだ線上に左右一つずつ存在していて、米粒位の大きさらしい。動物の「体内時計」を取り出すと、夜昼リズムが付かない状態になると言う。

私たちは朝起きて各種刺激を与えられる事で、「体内時計」の時差を調整できららしい。定年を過ぎたからといって、朝寝坊して、朝食が昼に変わり、外え

も出ずにのろのろしていると、一時間調整ができず、リズムが乱れる事になる。『時の流れに身を任せ』での一日では、太古から受け継いだ「体内時計」を地球に合わせる調整が出来ないのである。そして夜になると胃が痛いとか、血圧が昇るとか、一日の時間のリズムに関する症状には、最近「時間治療」なる言葉の医学用語までが出来て、盛んに活躍しつつあるらしい。まことに『時』はおろそかに出来ないわけである。神様は日々『時の流れ』を疎かにしない様にするために、わざと地球の自転に対し一時間狂わしておられるのかも知れない。過日全世界の注目を浴びながら白昼堂々と大往生を遂げた宇宙船ミール、地上と違って一日が夜と昼で構成されて無い世界、宇宙に出たら一日二十五時間の宇宙歴なるものを作って、全世界からメールを貰いながら生活する時代が来てもよいのでは無いかと思っている。自分には実現性の無いことではある。でも宇宙暦の提唱者として、その『時』を夢見て生きていたしたのである。そしてその時代を、冥土の障子の破れから眺めていたのである。

私は最近『青い鳥』の作者メーテルリンクの書いた『花の知恵』なる本に、私の師匠である中央図書館で接することができた。又さらに植物の生態学で多

くの執筆をされている多田多恵子博士の、『植物の知恵』なる文献も少し読まして戴く機会があった。

植物は、動かない。神経も脳も持たない。声も立てない。地に縛りつけられている。まさに風まかせ、虫まかせの世界である。

そして種の保存に欠かせない繁殖活動も動物である昆虫にまかせるしかない。

まさに植物は、『時の流れに身をまかせ』の受け身の典型的な存在であると思っていた。

ところがどっこい、それは私の浅はかな知恵である事を悟らされた。読めば読むほど植物たちの知恵の鮮やかさに、圧倒されるのである。確かに繁殖の受け手は昆虫にまかすのであるが、そのための工夫、また種を保存し運ぶ手段、今年と来年に別けて発芽する種の工夫を持っていく植物等、私が感じていた『身をまかせ』所ではなく、あらゆる手段と、戦いをもって進化してきたのである。そして植物と昆虫との共存共栄と言う、静と動、驚くべき哲学を作り、全世界で醜い殺し合いの続く人類社会を尻目に、栄えて来たのである。正に国連の学ぶべき姿であり、手本である。

一例をあげれば沼や泥炭地の水底に生える（タヌキモ）なる植物は、開花の時が来ると葉腋の小さな袋は空気で満たされ、（タヌキモ）特有な軽さで水の表面に運ばれ、その時はじめて小さなかわいい黄色の花が咲く。花は優雅に泥水を見下ろしながら、みずみずしい色を漂わせるのである。しかし受粉が済み実が実って来ると、周囲の水が袋に侵入して、（タヌキモ）は泥土の底に帰って、又新たに一人前の植物として成長するのである。

最近話題になっている、海底からの船舶の引き上げ技術などは、太古の昔から植物は日常茶飯事な事として、行っていたのである。

多田さんの書かれた文章を一部お借りすると、「縄文時代の遺跡から出土した種子が数千年の眠りから目覚めて芽を出した例もある。種子は、はるかな時空を旅するタイムカプセルでもあるのだ。私たち人間を含めて、動物は「現在」の時しか生きられない。だが植物は、種子と言う精巧なカプセルに生命情報詰め込み、未来空間に送り出す事に成功した。植物はその『知恵』をもって、自らは動かないまま、時空を越えて生きる能力まで手に入れてしまったのだ」と結んでおられた。

一九世紀中頃に「ダービンの進化論」が発表され、植物も数億年という時を費やして、進化して来たのかも知れない。でも子孫を残す為のあの巧みな姿、『知恵』は、進化という一言だけで済まされる現象とは、私には到底思えぬすばらしい出来栄である。

長い長い、時の流れの中に、この地球上で一番『知恵』が発達し、能力があると自負している人間、もっと謙虚にもっと広い心で、共に生きるすべてのものに愛情をもって、見つめ、生きて行きたいものと思った。十九世紀から二十世紀二十一世紀と、政治の流れや、科学の発達が目覚ましい時代に生きている者として、時の流れに没する事無く、植物の様な賢明な『知恵』をもって、一日の生活のリズムを整え、一年を、そして百年の大河に『時の流れに身をまかせ』！そして時には、『時の流れに竿指して』、無い知恵を絞って明日という日を、生きて行こうと思う。でも、でもである。ここまで書いて来て、私は次の聖書の御言葉が心に蘇ってきた。

『だから、明日のことで思い悩むな。明日のことは 明日自らが思い悩む。

その日の苦勞はその日だけで十分である。』

マタイ六の三四

『平和への龍灯』 概要

城所 進

大東亜戦争も苛烈になった昭和二十年五月から、八月の終戦になるまでの間に起きた体験と、心の葛藤を描いたもので、足の病気の為に戦地に行けなかった筆者が、戦地で戦って居る友と少しでも同じ思いに自分を置くべく、静岡県富士郡にある軍需工場に就職したが、一月で東京の実家が空襲で焼け、熱海で家族と共に生活することになり、戦時下の軍需工場の勤務と温泉町熱海での生活を体験する。熱海での暖かな平和な日々を体験しながらも、工場を通じて戦う事を信じていた筆者が終戦の玉音を聞き、信じがたい自分の心の葛藤の内に、熱海の山に出現した家々のまばゆいばかりの平和な明かりに触れ、初めて心に真の平和をもたらされた物語り。

平和への龍灯。

十分停車を終えた蒸気機関車は、汽笛を一段と高く鳴らしながら、『ガチャン』と言う連結器の高い金属音と、思わず手摺りに捕まる程の衝撃を、客車から客車へと次々に移しながら、沼津駅を動き出した。破けた幌の連結器のそばに乗っていた私は、その衝撃音に引きつられる様に我にかえり、破れから見える線路の玉石が、徐々に速度を増して行くのを、じっと見つめて立っていた。

『丙種合格とする。銃後で確り頑張ってほしい』と、老いた徴兵検査官の言われた声が私の耳に蘇って来た。足に補助機を付けての徴兵検査では、覚悟していた言葉とは言え、この短い言葉が、直立不動の私の頭から足の先まで、重くのしかかった言葉ではあった。同じ日徴検査を受けた小学校の同級生たちは、殆どが甲種合格であり少数の者が乙種合格であった。戦時中の事であり乙種合格でも、殆どがやがて戦地に赴く運命を背負せられた者たちであった。旧制中学二年の時体力検定を受け、俵担ぎで捻挫した左足首の骨についてしまった結核のため、膝から下ギプスをつけての三年間の松葉杖生活、早く直る為に手術することは、足首を切断する事だった。私にはそれを受ける勇氣はなかった。

そして徴兵検査の時も足の補助機が取れない私であった。赤い襷を掛けて婦人会の人たちに見送られて出征して行く若者達、送り行く万歳の声、その中に一人取り残された思いは、若かりし私には耐え難い声として響いていた。その思いを少しでも払拭し、そして戦地に出征した友とのせめてもの思いの通ずる場として、軍需産業を選んで就職への汽車の旅立ちである。なお、砲火をくぐって命懸けで戦っているであろう友と、少しでも近い環境に自分の身を置き、友と共にいる日々でありたいと言う願いでもあった。

しかし東京で生まれ東京で育った私が、初めて親とそして兄弟と別れ一人旅立つ感傷も、彷彿として沸き立って来る湯水のごとく、私には押さえ切れるものではなかった。

グレイター、ノドマークと言う名の小学校で唯一の米国人の同級生の子がいた。日本人と違い青い目が印象的に強く私の心に残っているかわいらしい女の子である。米国と敵味方に別れて戦っている現在、敵性民族としてどこでどうしているのかと、ふっと思い出す一瞬でもあった。

又、山が好きでよく山の話をしながら中学校まで共に歩ゆんでくれた、花田千秋という青森県出身の若い数学の先生がいた。私の大好きな先生であり、懐

かしいその面影が浮かんで来るのである。

列車の速度と共にどんどん早く過ぎ行く線路の玉石の様に、心の中で回り出した『回り灯籠』は、その早さを増しつつ、頭の中にある断片的な事々を掻きさらって、思い出を鮮明に現わし、そして次々と浮かべてはまた、消し去って行った。

時に、サイパン島が落ち、グアム守備隊が玉碎し戦いがますます苛烈になり、東京の下町を始め、日本各地が戦災の惨禍に会いつつあった昭和二十年五月の始めである。

当時の静岡県富士郡吉原町にあるN社に務めるべく、私の第二の人生の出発は、沼津駅を出た蒸気機関車と共に始まっていた。

吉原町にあるN社は平和産業から軍需産業に転換して出来た工場で、練習機と言おうか肉弾飛行機と言おうか、我々には解らなかつたが小型飛行機のエンジンを作っていた。工場の南側には、完成したエンジンの試験の為五、六台のテスト機が、四六時中耳をつんざく爆音をとどろかせ、回転するプロペラから出る強風は近付く者を吹き飛ばす強さをもっていた。

その響き渡る音の強さと、吹き出す風の凄まじさの中に、私は戦地の友と居

る同次元の想いを密かに感じていた。

工場の中には学徒動員で遠くは甲府から、動員された生徒が生産現場で所狭しと働いていた。女学校出立の婦人挺身隊もそれに加わって、力仕事も厭わず「もんぺ姿」も甲斐甲斐しく作業していた。正に人海戦術そのものの生産態勢であった。

私が努める職場は、エンジンを作る機械工場のジグや設備を設計する職場で、学校時代に動員で働いていた京浜地帯の上陸用海軍舟艇のエンジン工場とほぼ同じで、大した不安も無く仲間の人達も良い人ばかりであった。

仲間には明治の元老伊藤博文の孫に当たる人も働いていて、学習院出身はさすが上品な振る舞いと、奇麗な言葉使いが目立つ人であった。

私が就職して一カ月、初めての給料を五月二十五日に戴いたその日である。

父から東京青山にある私の実家が、二十三日の空襲のため焼かれたとの連絡が入ってきた。その頃は富士山を目当てにサイパンの基地からB29の爆撃機が黒い不気味な悪魔の様な格好をして南から現れ、迎える日本の戦闘機の挑戦や対空砲火を浴びる事も無く、暗い夜空に数拾機の編隊が、次から次ぎへと絶え間無く大空を覆う隊列となって、さながら自国の大空の如く悠々と我々の頭上

を通り、そして富士山を目当てにして右旋回あるいは左旋回して、東京方面又は名古屋方面に向かつていた。それは止める術を知らぬ、威風堂々たる姿と見ざるを得なかった。

私は父からの知らせを受け、取る物もとりあえず東京へのキップを手に入れる為、明け方の四時頃から、少ない一日の割り当て販売枚数の中から入手すべく、富士駅のキップ売りの行列に加わっていた。私の手元には、赴任したのは五月からであったが、郵便事情が悪く四月採用の通知が届かなかつた四月分の給料も合わせ、金九拾円が握られていた。私の公定相場給料は月給四拾五円であった。

私の乗った汽車は、空襲を避け何度か停車しながらも無事東京新橋駅に着いた。

汽車を降りると、電信柱は焼け落ち市電の架線は跡形もなく、市電はもとよりバス一台も動かず、見渡す限りの一面の焼け野原が私を待っていた。一度か二度の空襲が明治以来嘗々と築いて来た東京を、一夜に斯くまで変えてしまふとは、私にはとても想像出来る事ではなかつた。一ヶ月前に私を送り出した家々の立ち並ぶ懐かしい東京とは、あまりにも異なつた風景であり、実家のある

赤坂青山高樹町まで歩いての里帰りである。木造住宅の多い町並みは塀やら垣根等焼けて全くなく、行く先々まで全部見通せる焼け野が原である。ポツン、ポツンとかすかに残った建物、それらは焼けた石作りの蔵がほとんどであった。二十三日の空襲後残っていた所は、翌々日の二十五日の空襲で又焼けた様子で、歩けば歩くほど実家に近付けば近付くほど、家族の安否が私の胸を痛みつけていた。

溜池、六本木、霞町、高樹町と起伏の続く美しい町並みであり、外国の公使館大使館も多く存在する町であったが、正に瓦礫の続く町々であり起伏である。青山と言う名のとおり、樹木の茂った町であり、蟬の泣き声も至る所で聞こえた町であったが、泣き声は勿論立ち木一本目にする事ができない町と化していた。焼夷弾で燃えるものはことごとく燃やし尽くされた廃墟の有り様を、嫌と言う程味わらされた道程であった。

市電に乗って四十分位かかる距離を、夢中で歩いたせいか、見通せる所を近回りした為か、思ったより早い時間で我が家の青山高樹町十三番地に着いていた。父からの知らせによると、前の家が焼けないで残ったので、そこに住んでいるとの事であったが、家の回りは家一軒無い一面の焼け野原である。

わが家は二十三日に焼け、残っていたすぐ前の寿司屋の二階に移り住んでいたが、二日後の二十五日の空襲で移り住んでいた家も焼けた様で跡形無く、二十数年そして一ヶ月前まで住み慣れた我が家が、どこにあったか迷う程であった。

わが家の跡にたどり着いてみると、防空壕の焼けたトタンが動いて、中から母や弟の顔が次々と出て来た。しかも火傷、切り傷ひとつしないで出て来たのである。

私が歩いて来たこの東京の一面の焼け野が原、焼夷弾の高熱に取り囲まれた中で生きていられるのか、不安一杯の中で歩んで来た私は、怪我一つもせぬ親兄弟と会えたことは、正に奇跡としか思えず生涯で最もうれしい時であった。二km程離れた所にある根津邸の広い池のほとりに避難し、降りくる焼夷弾を防いでいたとの事である。狭いわが家の庭にも二、三発の焼夷弾が落ちたとの事であった。正に物量作戦である。

幸いわが家族は皆無事であったが、店という店も無く、とても生活できる状態でないので、早速会社の厚生課に頼むと、熱海の家族寮を貸してもらえ事になり、文字通り着の身着のまま熱海に移り住むことになった。

当時の社会構成は功勞の有った者に公侯伯子男と五つの爵位が残されており、貴族院はそれら爵位の有る人たちで構成されており、議會も貴族員、衆議院の二院制で構成され、我々平民との身分制度の残る時代ではあった。東京の実家の地主は高木子爵で、昭和天皇の弟君の三笠の宮の妃殿下の実家でもあった。わが家とは百mと離れていない距離であった。

そのころの会社組織の中にも社員と工員の身分の様なものがあり、また一般会社組織の中にも多く残されていた。N社の場合、社員には金モールの帽彰がついた帽子を支給され、一目で解る様な形態でもあった。社員の資格で入れた私は、運よく社員寮が空いており、一カ月勤務の新入社員にも、会社は豪華な熱海の社員寮を貸してくれたのである。

父は神田の出版社に務めがあるので東京に残る事として、私と母と弟二人の四大家族での生活が始まった。十畳位の部屋二つがわが家の全面積である。しかし二度も戦災にあったわが家には広すぎる空間であった。寮は四階建ての立派な元旅館であり、部屋には玄関らしい土間があったが、炊事をするところは無く、廊下の一隅が共同の炊事場であり、トイレも共同の状態であった。鍋釜一つ持たぬ私たちに、隣の部屋の課長の奥さん等が気さくに早速鍋釜など貸

し与えて下さったり、買い物に付き合ってくださいたり、五十年住み慣れた東京を離れざるを得なくなった母に取って、人の親切が何物にも変えがたい身に染みる日々であった。また氣丈夫な母ではあったが、地の縁人の縁と、私よりはるかに思い出の多い母に取って、東京青山を離れた事はことさらに、寂しかったのであろうか、涙を垣間見せた事があった。

東京の家は明治の時代に建てたのか、電灯の引かれる前に使われていたであろう『ガス灯』の配管が屋根裏に残る旧家であり、また父たちが嘗々と苦心して建てた借家も、たった一夜の空襲で廃墟と化してしまったのである。母に取っては耐え難い悲しみの出来事であったのだろう。国と国との戦いとは言え、武器をもたぬ一般市民がもつとも被害が多いと言う矛盾した現象が現れていた。平和を壊して命を奪い戦うと言うこと事態が、矛盾した行為であったのである。でも軍国主義に教育された私は、正義の戦いとして東洋平和の聖戦として、個人の生命の貴さ、財産等考える暇もなく、戦いは悪だとは、少しも思っていない。

伊豆北部に位置する観光都市熱海、私は今まで泊まりに来た事は一度もなかった温泉町である。会社の寮は熱海中心部の市役所のすぐそばで、熱海駅からだ

らだら坂を下って約二十五分の位置にあった。熱海駅を降りると温泉を流すパイプがあり、また使用済みの温泉をながす側溝があるせいかな何となく暖かな道並である。家族と共に在る喜びがもたらすものか、駅からの下り坂がなす自然現象なのか、独りでにわが家に向かう足取りは軽く、私に取っては何となくらん気分であった。

真っ先に寮についた者は、入り口にある5cm位もある温泉のバルブを開いて家に入る慣になっていた。私は油が切れて重くなったこの温泉のバルブを開く事が、何となく喜びを感じずる一瞬でもあった。他愛のない行為ではあるが、その中に今日一日生きていた思いが沸いてくる瞬間であり、熱海に帰ったと言う実感を感じずる、喜びの時でもあった。

とうとうと流れ出る湯は、家族の女衆が洗ってくれてあった広い湯船をたちまち満たし、白い湯気を立てて私たちを待っていた。

会社勤めの私たちは真っ先に風呂に入れる特権が与えられていた。元旅館だったせいで、共同で入るお風呂は広く、並々と流れ溢れる温泉は、満員電車のデッキに捕まる通勤の疲れも充分に流してくれていた。男女の入浴時間の区別はあったが、一列車遅れたりして、まごまごしていると女性がどんどん入って来て、

独身の私をどきまぎさせられる時もあったが、温泉地では男女の混浴は当たり前みたいになっているらしかった。お風呂に入って居る瞬間はまさに戦時中を忘れさせる天国であり、身も心もリラックスできる時であった。勿論、熱海と言えどもたまには空襲警報も鳴り、電灯には暗幕をして狭い面積の灯かりの下での生活である。防空壕の設備らしいもの何一つ無い寮では、風呂に入って空襲警報が鳴ると裸のまま死ぬのは、みっとも無いと衣服をまとう位であった。

東京では昭和二十年始めには、空襲による類焼を少しでも少なくするために、所謂家屋疎開が始まっており、外壁を取られた柱だけの家を、隣組総出でロ―プをかけて引き倒していたが、熱海もご他聞にもれず、我々のくる少し前に旅館を含めた強制疎開があったらしく、寮のすぐそばには通称『ふかし場』と言われる場所があった。それは家屋疎開した旅館の温泉の噴出口に台を作って、その上にセイロが置ける様になっているものであった。セイロの中身は各家庭でふかして食べる材料が入っており、買い出しに行つて手に入つたお芋やら、お米の変わりに配給になつた豆類、等々千差万別の食料であろうと思われるが、布巾で覆われたセイロの中身は勿論知る由もなかった。そして置いてある人のセイロの上に、自分のセイロを重ねて行くのである。拾段位重ねているときも

時々あった。そして家に帰り出来上がった頃取りに行くのである。

自分のセイロの上に同じ様なセイロが更に重ねられているので、名前が書いてない限り自分のセイロを見いだすのは不可能に近かった。管理する人は居らず自主的に使われており、そして一銭もお金は取っていなかった。屋根のない狭い所ではあったが、のどかな良き時代を思わせる『ふかし場』ではあった。

『ふかし場』は夜も昼も噴出する温泉と共に、二十四時間フル稼働で働いていた。でも何度か行っている内に回りに古びた椅子が置かれ、利用している人は蒸し上がるまでそばに居てもって帰るしきたりに変わっていた。推定であるが食料事情が悪くなり、無くなる事が出て来た為と思われる。

でも戦時下の生きるか死ぬかの時代に、熱海で無ければ考えられない風景がそこに存在しており、戦災で家を焼かれ肉親を失って、ぎすぎすした眼をしていた東京の人たちを知っている私に取っては、まさに平和を先取りした風景であった。

さて朝の通勤であるが、駅までの登り坂を二十五分、熱海吉原間の汽車通約一時間、吉原駅から会社まで歩いて約二十五分が毎日の我々の日課になっていた。それも戦時下の本数の少ない汽車なので、我々はまず座って通勤したこと

は無かった。

私の勤務する部屋は、工場では一番高い階にある設計室であった。七月二十五日と覚えているが、アメリカの艦載機が一機吉原駅のそばの製紙会社の上空に飛来して、急降下しながら銃撃しているのがよく見えた。その下の人たちがどんなに恐ろしい気持ちで逃げ惑って居るかなどとの感情は沸いて来なかった。まるで映画を見ている様にガラス窓に皆が集まり急降下する艦載機を「格好いい」とはさすがに言う者はいなかったが、多少それに近い気持ちでいたのでは無いかと思われる風景であり、私たちの態度であった。

今銃撃を受けている製紙会社から我々の所まで歩いて二十五分の位置である。飛行機ならほんの一瞬の距離である。でもその見物の時は皆、自分たちに降りかかる怖さ等意識しない瞬間であった。それより銃撃する艦載機に見とれるのに夢中になる一時である。窓下に有る防空壕に誰一人として避難した者はいなかった。日本からの迎撃は飛行機は勿論、対空砲火も見るとはできなかった。

我々が成す術は無いとは言いながら、死線をさまよう人が居る此の現実を前にして、高みの見物とは、生きる貴さの意義とか、人を思いやる心とか、私たちは驚くほど希薄になっていた。そして死に対する恐怖心を押さえさす戦時下

の教育に、私たちはどっぷりと浸かって居たのかもしれない。

ジュネーブ条約では、戦っている相手同士でも、銃を捨て降参の意志を示したら殺してはならないと言う条約があるという。武器を持たない相手、自分に少しの危険を与えぬ逃げ惑う市民を銃撃することは『悪』であると言う思い、いやそれが戦いの中で『正しい』のだと、恐らく米軍の銃撃手も考えていた事と思われる。無抵抗の者でも相手の国の者は殺すのが戦争なのだ、また殺されても仕方が無いのだと、何時の間にかそれらに疑問すら持たない我々の心に変えられていた。

真に戦争とは、勝ち負けに関係なく敵味方共、『神の愛』を踏みにじり、人間の心を変えてしまう『悪魔』の虜の恐ろしさを表徴していた。

その頃新聞を賑わしていた記事があった。戦いで捕虜になった敵兵を強制労働にでも連れて行く時であったのだろうか、その列を見て一人の少女が『おかわいそうに』と漏らしたたった一言について、多くの同胞が死ぬか生きるかの戦いをしている現在、不見識な言葉をはくなど大見出しで叩いていた。

そして盛んに賑わした標語は『此の一戦、欲しがりません勝つまでは』であった。一人の人間としての素直な感情も戦いの前に黙殺する時代であり、同胞の

受けて居る銃撃を他人事の様に見ていた我々の感性も、とにかく私を含めて戦時下の荒んだ、曲げられた気持ちの現れの一端ではあった。

さてそれから五日後の事である。会社に出社しようと熱海駅まで行くと、駿河湾北部に敵機が来襲中で汽車が不通との事、やむなく家に戻り待機することになった。熱海には敵機は一つも飛来せず、平和そのもので突然降って湧いた休日に戸惑い勝ちの一日ではあった。

翌日出社すると、機械等を補修する工機工場の屋根は大きく破損し、圧縮空気を作るコンプレッサ室にロケット弾が落とされ、コンクリートに大きな穴が明けられていた。従業員の人達は工場周辺のナシ畑に逃げこんで銃撃を避けた様であるが、襲いくる銃弾の音に正にクモの子を散らした様に逃げ惑う地獄の怖さを経験した様である。そして一人の犠牲者が出ていた。私たちは何も知らず温泉に浸かっていた時である。電話連絡もままならない戦時下とは言え、問い合わせもしない我々の感覚も、熱海の平和になれ過ぎていたのかも知れない。まさに今日工場がやられている等とは思ってもよらぬ事であった。

犠牲者の名前も葬儀についても、公には何も知らされ無かった。

幸い生産ラインの被害は少なく、翌日の生産は続けられており、テスト台の

轟音と爆風は、痛みを覆い隠す如く、一段と強く響いていた。

八月八日の事と覚えているが、就業時間が過ぎて吉原駅に駆けつけて見ると、登り列車は二百分遅れと掲示してあった。各地の空襲により上り列車はほとんど定刻での発車は考えられない日々ではあったが、三時間あまりの遅れは慣れっこになっていた我々の感覚も、いささかうんざりであった。そして昨日の新聞に出ていた広島での新型爆弾は核爆弾によるものだと、だれ言うとなしに口から出ていた。軍部が秘密にしている情報も何とは無しに我々の耳に達していたのである。

列車の遅れ二百分は待ち切れないので、時々やる手で次に到着した貨物列車の連結器等に乗っかっての帰途となった。勿論違法の危険な事ではあるが、駅員も見逃してくれる既成の事項とはなっていた。ただ石炭を炊く蒸気機関車を先頭にして走って行く貨車である。丹那トンネルに入ると石炭の煤が煙と一緒にになって我々を襲ってくる。ちいさな煤でも汽車の進行で進む我々の顔にはまともな強さでぶつかってくる、とても目等は開いていられる代物ではなかった。

それでも早く家に着きたいのである。そして真っ黒くなった顔を温泉の湯で流したいのである。まさに北伊豆熱海は我々の心のオアシスであり、体の憩い

の唯一の場所であった。

でもその平和な熱海にも、東京方面より多くの学童が疎開しており、三千名余りの子供たちは旅館やお寺に預けられ、平和時の観光旅館は疎開児で満ちていた。勿論親を離れての疎開である。集団生活に慣れない幼い子もいるであろうが、東京での焼け野が原を見ている私にとっては、熱海当たりえの疎開は、恵まれている存在の様に思えた。父からの情報によると、私の卒業した青南尋常小学校はその頃もう鉄筋四階建てであったが、焼けなかったので教室はほとんど戦災にあった人たちで一杯であって、授業はほとんど行われていないしかなかった。

また熱海の海岸近くにある病院は、戦地で負傷した白衣の軍人で満ちていた。私が熱海で見た軍人は戦闘服では無く、傷つき療養する白衣の軍人であった。正に熱海は戦いの外におかれた恵まれた存在に近かった。しかし戦いは遠慮なく我々の生活に迫ってきた。日本全国同じだとは思っても、山に囲まれた熱海の最も不足したものは食料であった。配給米が大豆になり、乾燥バナナになって配給されていた。すぐ隣の駅の函南に行けばサツマイモなどが多少買えるのであるが、汽車のキップを買うのに半日掛りである。吉原までの定期を持つて

いる我々は、月月火水木金の歌にある様に、多くて月に二日位の休日ではあるが、背に腹は替えられないと、リックサックを持つての農家参りであるが、芋もおいそれとは売ってくれず、まして新参者の物物交換の物を持たぬ我々罹災者には、一片の芋も中々手に入らぬ時代であった。

課長も我々平社員も此の時は同じ思いの一日ではあった。誰かが戦争が終わつたら、今に見ている今度は農家との戦いが始まるぞ、といたりしていた。

また一段と戦局が苛烈となり、本土決戦を決意した軍部が、熱海北方の山に陣地用の壕を掘り出したと言う噂を耳にしたのも終戦まぎわであった。殆どが勤労奉仕で駆り出された動員住民の報酬は、一日タバコ三本と米五勺であった。

そして八月拾日我々が会社に行つてからの事であるが、艦載機が熱海駅付近を機銃掃射して壱名の犠牲者が出てしまった。でも不思議なことに、東京では各自の家に防空壕を掘り家族全員が非難する所を確保していたのに、熱海では余り防空壕にお目にかからなかったのは、私の認識不足のせいなのかそれとも平和に慣れた熱海の人たちであったのか、今だに分からないことである。

そして戦いが苛酷になった八月に入つても、戦闘服を着た日本の軍人をほとんど見ることはなかった。敵軍の上陸は千葉県の九十九里ヶ浜当たりとの想定

のため熱海には軍人が回り切れなかったのかもしれない。

軍人を見かけぬ熱海、そこには日本としての軍事的価値もなかったのか、婦人会の竹槍突撃の訓練もなく、戦う意志も私には感ぜられなかった。『恋いごろも』に収められた長詩『君、死に給うことなかれ』を歌った熱血の歌人、与謝野晶子の愛した伊豆、そして熱海は、考えかたも人の心も、晶子の平和の血を引いていたのかも知れない。

八月十五日何時もの様に仕事をしていると、正午に総務課前の広場に集まる様に各職場に通達が来た。沖繩が全滅し、広島に長崎に原子爆弾が落とされた戦況より、いよいよ本土決戦に対する軍部当たりの重大決意が述べられるのかと思いつつ、工場長、配属将校並びに従業員全員が、正午のかんかん照りの広場に三々五々集まった。そこで聞かされたラジオからは、天皇陛下の一種独特の抑揚のある御言葉が聞こえて来た。雑音交じりのラジオの声は後ろの方に居た私には良く聞き取る事ができなかった。ラジオが終わると配属将校が怪訝な顔をして工場長室に入って行くのを、私は印象的に見ており、六十年余りたった今も瞼の中に残って居る忘れられない光景である。配属将校は軍需工場では、工場長以上に権限を持ち、生産に命をかけた存在であった。

職場に帰るとだれ言うど無しに、日本は敗れて戦争は終わったのだと言う声
が流れて来た。でも私には到底信じられない事であった。古事記やら神皇正統
記を教えられ、教育勅語、軍人勅諭で鍛えられた私たちの年代の者は、この位
で簡単に降伏するとはとても考えられない事であった。一億玉砕が最後の手段
だと私は信じていた。

そして良く聞き取れなかったラジオに、もどかしさを強く感じていた。

学校時代に予科連に志願して赤い襷をかけ、全校生徒に送られて行ったあの
友達の顔が、臉の中によりがえって来た。戦争が終わり平和と言うものが私に
は良く理解できなかった。

ともかく二六〇〇年の皇国の歴史の中で、敗戦ということとは考えられない事
であった。

戦いに敗れば、男は去勢され、女は犯される、という言葉がよみがえって
来た。

翌日は入社しても仕事にならなかった。そして全員が集められ工場長の挨拶
があり、しばらく自宅待機をして欲しい旨の挨拶があった。学徒動員で来てい
た生徒達は帰宅の準備を始めだし、我々も机の中の整理をしだしたが、とても

手を付けられる状態ではなかった。

熱海に帰る汽車の中では、九州では終戦に反対し、独立して戦争を続ける等という噂が流れ、一種独特の雰囲気が流れていた。

昨日から今日まで、突然降って湧いた出来事に私もぼっかりと空いた心の空間を埋める手立てさえなく、先のことなど何にも考えられない夢遊病者の様な気持ちで、暮れるには少し早い熱海の町並を海の方に歩いていった。

普段はめったに歩かないのであるが、何時の間にか私は海岸通りを歩いていった。打ち寄せる波の音も私には用が無がなかった。

海の地平線がだんだん見えなくなり、やがて夜のとぼりが熱海の町全体を襲って来た。

山々に囲まれた熱海、夜ともなると普段は灯火管制で、真っ黒な山の稜線がかすかに分かるだけの真っ暗闇の熱海、その屏風の様な山に一つ二つ灯火がつき出したのである。真っ暗の山の中に五つ六つ、数え切れない早さで灯かりがついて行く。そして数分の内に囲っている山々に、まばゆい光りの星を輝かした如く、灯火は灯っていた。

暗黒の山から、光りの山、光りの美しさとは…、生まれて初めて気が付いた

様に私を襲っていた。灯火管制の黒い暗幕の取れた家々の灯かりが、正に平和を表すダイヤモンドの様に輝き迫って来たのである。気持ちの上では到底割り切れなかった私に、終戦、平和、という実感を私にもたらせてくれたものは、人の言葉では無く、暗幕の取れた家々の灯火であった。

そこには着飾ったネオンサインの輝きは無かった。戦いと言う恐怖から解き放たれた家々の安堵の思いと、戻されるであろう暖かな家庭の明かりとが、織り成して輝いているものであった。観光都市熱海ではなく、暖かい平和を象徴する熱海の姿を表していた。

そしてそれは敗戦を心の奥深くで否定し、今まで生きて来たバックボーンを、必死に守ろうとした私の心を、大きく揺さぶりぶち壊す光りであった。

暗黒の闇を破り、きらめく様に熱海の山に灯ったあの数々の灯火が、煮え切れぬ私の戦いへの思いをぶち破り、『平和への龍灯』として、はっきりと輝いていた。

◇
◇
◇
後述。

春には梅の香で満ちる熱海の来宮梅園は寮から歩いて三十分とかわからない位置であるが、私がそれを知り足を運んだのは、この戦いが終わった後であった。平和の有り難みが、乾いたガーゼに水が滲み上がる様に、私の心にも除除に浸透してくれていた。

マッカーサー到着を聞き、ご婦人方の一部は田舎に避難された方もいた様であるが、私はジープに乗ったアメリカ将校を一回見ただけで、平和な熱海には何事も起こらなかった。

後から見た文章であるが吉原二丁目の防空日誌には、次の文が書かれていた。『昭和二十年八月十五日午前十二時、陛下の降伏御放送により停戦となり、国民の現存者はこれにより救われたり』と記してあった。

吉原は飛行機のエンジン工場や、軍用飛行場などを持ち、また機銃掃射を受けた町とし、そして空襲で灰塵に帰した静岡市や沼津等近隣の町の現実を前にして、終戦により『生きていた。救われた』と言う言葉となって、残っている史実は、次はやられて死ぬのではないかと言う恐怖感が、熱海よりはるかに強烈に人の心を支配していたのであろう。

あとがき

昨日僕が 生きて来たように

今日僕は 生きている

他人が たどって来た道を

歩みながら 一步一步 生きている

昨日の僕から 脱皮しようとしながら

惰性で生きている 日々

今日こそは 今日こそは

先人の歩んだ 足跡に

一歩踏み出した 私の足跡

先人の立てた道標に

私の道標を 一本立てて見たい

崩れおれる 道標かも知れない

貧しく 弱い 私の道標かも知れない

でも それで良いのだ

私の人生を素直に表したものであれば

それで 私は満足なのだ

